

カンボディア・タニ窯跡群 調査への予察

はじめに 文化庁伝統文化課と奈良国立文化財研究所では、1993年度からアンコール文化遺産保護に関する研究協力事業を行ってきた。本事業は内線の混乱によって危機的状況にあるカンボディアのアンコール文化遺産の保護と研究に対して、カンボディア側との共同研究を通して寄与しようとするものである。遺跡探査、写真測量、石像建造物の劣化対策、発掘調査技術、修復技術、広域遺跡整備の6項目を目標とし、相互に研究者が交流するとともに、相互に相手国で発掘調査などに参加することによって事業を進めてきた。

発掘技術の共同研究に関しては、カンボディア国内では、アンコール遺跡群内のバンテアイ・クデイ寺院において上智大学アンコール遺跡国際調査団と協同で発掘調査を進めてきた。1995年夏に、タニ窯跡群の発見が報じられて以降、カンボディア側の要請もあり、本窯跡群の調査を共同研究の対象にすることで準備作業を行ってきた。

準備作業 上記の経緯を受け、1996年度からタニ窯跡群における詳細な地形測量調査を開始した。現地の文化財保護機構であるAPSARAに、奈良国立文化財研究所と上智大学アンコール遺跡国際調査団が協力する形で作業が行われた。1998年度ですべての測量が終了し、1/200地形図10葉を含めた報告書を出版した。これと併行して1997年度からは窯跡群への遺跡探査を実施した。成果の詳細は昨年度の年報(註1)で報告を行った。

以上のように窯跡発見以降約3年間をかけて、本格的な調査に必要とされる事前調査を行ってきた。本稿ではこうした事前調査によって明らかになった事実を整理し、今年度以降の本格的調査に備えたいと思う。

立地 今回の対象となっているタニ窯跡群は、アンコール・ワットの東北東約16kmにある。南西に約2.7km離れてプノン・ボクがあり、東に13.5km離れてプノン・クレン丘陵が南北に連なる。幅約100mで南北に約700m延びる低丘陵上に、南北2群に分かれて窯跡が存在する(47頁)。この他にも2群以上の窯跡が分布するとの報告(註2)もあるが、現在未確認である。細長い丘陵上への窯跡の立地は、近くでJSAチームによって発見されたクナボ村

の窯跡でも見る事ができる。特にクナボ村の窯跡では、バライの堤と思われる大型の堤防上に南北に一列に窯跡が分布することが確認されている。タニ窯跡群ののる丘陵が人工的なものかには判断できないが、今後の窯跡分布調査の際には注意すべき点である。これまでもフランス極東学院J.デュマルセなどによって、寺院跡の近くに窯跡が構築される様子が報告されている。石造建造物群と窯業生産との関連を探る上で示唆に富むあり方であるといえる。

今回測量や探査の対象とした2群の窯跡は、南のA群6基と、北のB群7基がある。それぞれ規模にかなりのばらつきがあり、最も大きいA群1号窯で直径約23m、最も小さいA群4号窯で直径約7mを測る。平面形はいずれも不整形円で、特にA群の東側に分布するA1からA4号窯は、土取りによって変形が著しい。またB群ではB1号窯を除き総じて削平を受け高さの低い窯跡が多い。窯体構造 別組織によって試掘が行われ、窯構造の一部が判明した。それによると、焼成室の下半部は未掘であるが、細い煙道部から焼成部にかけて徐々に幅が広がる平面形で、床面傾斜は約21度である。これはすでに発掘調査によって窯構造の明らかになっているタイ東北部のクメール陶器窯の、長さ約25.5m、幅約3m、焼成室床面傾斜約15度という窯構造とかなり異なる様相を持つ(註3)。タイ東北部の諸窯は、黒褐釉陶器も焼成する12世紀頃の窯と考えられており、この違いが時代差によるのか地域差によるのか興味をもたれる。

焼成器種 この窯跡では大きく分けて瓦と陶器が焼成されている。

1.瓦 瓦には軒先瓦・丸瓦・平瓦・棟装飾瓦がある。軒先瓦は蓮弁をかたどったシンプルな形で、J.デュマルセの分類(註4)ではHタイプとされるものに近い。灰釉がかかっている。棟装飾瓦もかなりの量が出土しており、薄い灰釉のかかるものが多い。J.デュマルセの分類(註5)ではAタイプと呼ばれる、比較的作りの丁寧な大型のものである。

2.陶器 陶器には灰釉陶器と無釉炆器の2種がある。黒褐釉陶器は確認されていない。灰釉陶器には大きく分けて丸型合子と筒型合子の2種があり(図1)、丸形合子には薄い灰釉のかかった丸型無高台のものと、灰白色の精良な胎土に薄く灰釉がかかり、一見して白磁と見まがう

ほどで、低い高台のつく2種類がある。筒型合子は丸型合子の前者と同じ器胎の1種のみである。ただツマミの形状に若干の違いが見られる。

無釉炻器は非常に多くの種類があるが、いずれも大型の器形のため破片からは分類が困難である。中でも特徴的なのが従来リドヴァン陶器と分類されてきた広口壺と、大型の長胴甕の2器種(図2)である。

広口壺は灰黒色・灰紫色を呈し比較的堅緻な焼き上がりを示す。従来この手の陶器をグロリエの命名に従ってリドヴァン陶器と呼び慣わしてきた。これをグロリエは黒褐釉陶器への過渡的な陶器と位置づけていたが、これまでの当該陶器の観察からは、リドヴァン陶器と呼ばれてきたものには積極的に施釉の存在を証明できる例がない。むしろスリップの発色と考えた方が妥当であろう。無釉炻器の一種として位置づける必要があると考える。

長胴甕には口縁部形態の違いで数種類があり、多くは灰色・灰黒色の須恵質の焼き上がりを呈する。この種の長胴甕は、12世紀頃には黒褐釉陶器が一般的であるが、黒褐釉登場前の本窯跡出土品が同じような器形で無釉炻器であることから見て、当初無釉の雑器として出発した長胴甕が、後世黒褐釉を施され、寺院や骨蔵器として使用されるようになる、と考え得るかもしれない。

時期 本窯の所属時期は、出土品中に黒褐釉陶器の存在が確認されないところから、少なくとも10世紀後半以降には降らないと考えることができる。ただ灰釉の釉調を見る限り、9世紀、クメール陶器最初期の灰釉陶器とされるクレンタイプの灰釉陶器と比べ、明らかに本窯跡出土品は釉が薄く粗雑の感を免れない。9世紀後半から10世紀前半頃と考えるのが、今のところ最も無難な線であろう。

まとめ 今回の窯跡の発見で、ブノン・クレンが唯一の生産地として考えられていたクメール陶器生産を、さらに幅広くとらえ直すことができるようになってきた。本稿で述べたように、本窯跡群をはじめとする新発見のクメール陶器窯跡との立地から、バライなどの石像建造物群の建設と窯業生産との関連が推定されるようになったり、アンコール遺跡群の各地に衛星的な窯跡群が散在する様子が推定されるに至るなど、今後のアンコール遺跡群の考古学的研究に新たな視点を将来したと言える。さらに、本窯跡群の発掘調査が行われれば、ある限られた

時期のクメール陶器の構成が明らかになり、編年の基礎資料となることが期待される。(杉山 洋/飛鳥資料館)

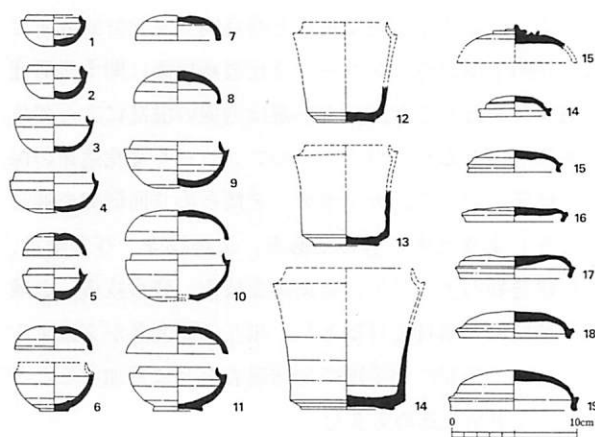


図1 タニ窯跡群出土 灰釉合子

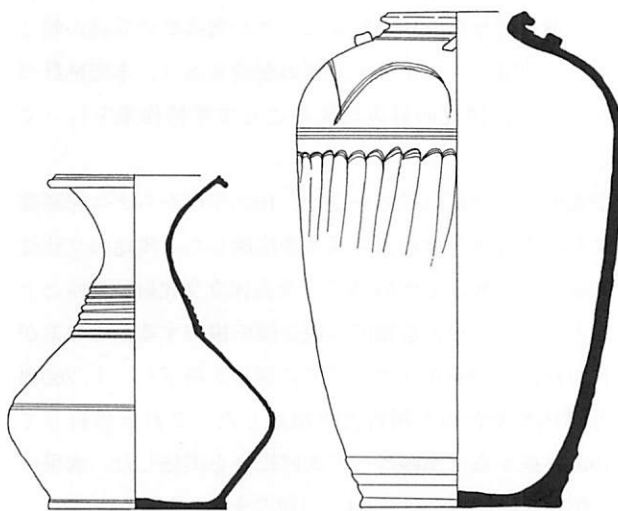


図2 広口壺(左)と長胴甕(右)

註1 『奈良国立文化財研究所年報 1998-I』48-49頁 1998

註2 青柳洋治・佐々木達夫・田中和彦・野上建紀・丸井雅子「アンコール時代の大規模窯跡群の発掘 -タニ村の新発見-」『アンコール遺跡を科学する』29-36頁 1999

註3 タイ芸術局「プリラム県クラアット村の窯跡」1989

註4 J.デュマルセ「クメールの小屋組と瓦」(フランス極東学院学報 考古学報告VIII 1973、邦訳『アンコール文化遺産保護共同研究報告書 I』92頁 1997)

註5 註4 195頁